



DOJIN

R18

成人向け

18歳未満の

購入・閲覧禁止

著：維兵  
画：些細



お  
さ  
な  
め  
じ

三

ル

ク

直接的な接触を介さない魔物化、いわゆる「空気感染」による魔物化には複雑な条件が絡む。

魔物娘から発される魔力によって起こる現象であるが、実際の段階から魔物化が発生するかはその場にいる魔物娘の種族や個体の魔力の強さや人口密度、また影響を受ける人間の耐性などの条件によってまちまちである。この法則を掴むべく空気感染が起こったケースをまとめていたが、その経過で興味深いデータが現れた。それは魔物化の対象である女性に「想い人」がいるかどうかで魔物化の起こりやすさに大きな異差があるという事だ。

人の想いを数値にして測ることは出来ないものでこれは主観になるが、その想いが大きければ大きいほどに魔物化に至る可能性は高く、速度は速いように思える。一体どういった原理で恋心が魔物化の進行速度に関わっているのかは未だわかっていない。

～現代魔力研究部門主任 K・K～



藤<sup>せむじ</sup> 郁子<sup>いくこ</sup>には八坂<sup>やさか</sup> 翔太<sup>しょうた</sup>という小学からの幼馴染<sup>せうじゆた</sup>がいた。

郁子から見た翔太の印象は「がさつ」「ずぼら」「無神経」「能天気」それら全てを統合して「バカ」というのが最も適当な表現だろうか。

しかしながらバカであるという印象と悪感情は決してイコールではない。

むしろ憎からず思っていると云える、いや、憎からずという表現はいささか控えめにすぎるだろう。

大変に不本意な事にそのバカの事が郁子は好きなのである。割と洒落にならないレベルで。

「むむむ……」

好きになった切っ掛けはあると言えはあるしなとは言えない。

砂場で一緒に遊んでいた時にスコップを貸してくれた時だったかもしれない。

こつそり一人残って遅くまで逆上がり<sup>さかあがり</sup>の練習をしているのを見た時かもしれない。

陸上の大会で負けた時、涙を堪えて怒ったような顔になっているのを見た時かもしれない。

プールで日に焼けた背中を見た時かもしれない。

放課後に友達と馬鹿笑いしてるのを見た時かもしれない。

頭をぼんぼんと叩かれた時かもしれない。

ベンチで居眠りをしている寝顔を見た時かも知れない。

「うぬぬぬ……」

要は全部である、長い年月をかけてそれらの小さな想いが雪のように降り積もり。

気が付けば雪だるまのように自分の中で大きくなっていった。

最もその想いを伝えるだけの勇氣は郁子にはまだないが……。

「くぬっ！ふぬっ……！」

伝える気がなくとも好きな人には良く見られたいというのは当然の事である。

例え相手がファッションに毛ほどの興味がなくとも、髪型の変化にも気づかないような相手であつても、その努力は怠りたくない。  
なので、こうして郁子は。

「ん~~~~~ん~~~~！」

新しく買った洋服をどうにか着ようと。

ぶちんっ！

「あつ」

唾然とする郁子の顔が映る鏡に、その胸元から弾け飛んだボタンがぶつかってカチンと音を立てた。

ころころと転がるボタンを拾う仕草も見せず、郁子はその唾然とした視線を下に持っていく。

自分の視界の下に広がる二つの山脈に。

「まじで……？」

今しがた内部からの圧倒的圧力に白旗を上げた洋服の値段は、高校生の財布で許されるギリギリのものだった。



その服を台無しにした元凶を郁子はそっと持ち上げてみる。

重い。

「またサイズ上がって……」

言いながらがつくりと膝をつく。

藤 郁子

サイドテールと気の強そうな美貌が眩しい今をときめくJK。

そんな彼女のニックネームの遍歴は「ホルスタイン」

「牛乳タンク」「バインガーZ」「爆乳大元帥」「肉グ

ローブ」……ちなみに全て翔太命名である。バカである。

そんなバカを見返してやろうと買ったオシャレ着をその元凶に破壊された郁子は自室で崩れ落ちたままぶつぶつ呟く。

「まだか……まだ育つつもりなのか……いくらあたしの名前が「いくこ」だからってさあ……ふふふ……うまいこと言っとる場合かい……うふふ……」

だいぶ参っている様子であった。

「しょうがない……育ったもんはしょうがない……まあ、アイツは好きみたいだし前向きに考えよう」

くしゃくしゃと髪を掻き乱し……ついでに頭をこりこり搔く。

「なんだろ最近……痒い……ちゃんと洗ってんのに」

ぶつぶつ言いながら名残惜しげに服をしまい、ふと思いつて部屋の姿見に何も着ていない自分の全身を写す。

「……引くわー……」

大きい、ただ大きいだけでなく張りがあって思い切り前方に突き出ている。

いわゆるロケットおっぱいというやつだ。

腹回りは細いものだから余計に迫力がある。

力強いその肉感衣服によって押さえつけても反発が激しく、最近制服が合わなくなりつつある。

もはやちよつと人を選ぶレベルになってきているのだが、郁子にとつての問題は翔太からの視線である。

およそデリカシーというものに縁がない彼には散々この胸をネタにからかわれてきたが、中学に入ったあたりからどうもその視線に「本気」の熱を感じるようになってきた。

むしろこのところのからかい方はそれをあからさまにすることで逆にその欲望を誤魔化しているようにさえ見える。

正直、それは郁子にとって良い事だ。

他の男達から見られるのは不快でも、好きな人からそう  
見てもらえるのは嫌な事ではない。

問題は……。

「……ん……」

郁子は赤面する。

鏡に写っている自分の乳首が隆起して来たからだ。

恥ずかしい。

もっと綺麗な感じならいいのに、自分の乳首は興奮を覚  
えて立ち上がると乳輪ごとふつくと盛り上がるのだ。

それが何だかひどく卑猥な感じに見える。

ただでさえ自己主張の強い部分なのにその先端にこんな  
ものが付いているというのが本当に恥ずかしい。

そして立ち上がった理由というと本当にバカみたいだ。  
自分の体を見ていて、翔太にこの裸を見せたらどう反応

するだろう、なんて変態みたいな妄想をしたからだ。

いつも彼に「バカ」だの「スケベ」だの「変態」だの言  
っている自分がまるで人のことを言えない。

そつと手を房の下に差し込んで持ち上げる。

重い。

その重みを確かめるようにゆさゆさ揺らして見せる。

AVみたいだ、いや、AV女優にだってこんな滅多に  
いない、すごいでしょ、見て、翔太、見て。

見てるだけじゃなくて触ってよ……。

「んんふ……」

ぐぐぐ、と自分の胸を中央に寄せて変形させる。

郁子の頭の中で既にそれをしている手は翔太の手だ。

そのままゆるゆると乳肌の上に指を滑らせ……。

「……って、ダメだってヴァー！」

と、胸から手を引き離す。

そう、問題は自分がこんなだからだ。

想像しただけでこんなになるのだから実際に彼の視線を  
胸に感じるとすぐエロい気持ちになってしまう。

昔はこんなじゃなかったのに近頃はどんどん悪化してき  
ている気がする。

……下着を履いてなくて幸いだった、また洗濯する羽目  
になるところだった。

「はあーあ……」

（ムネ、じんじんする……重い……うずく……本当に他  
の人と違うのかな）

「こういうこと」をするように……してしまうようにな  
ってから色々調べた。

近頃はネットで性に関する情報だって何だつてすぐに手  
に入る。

他の女の子もこういうことをするんだっけだろうがない、自分だけが変わるんじゃない、と自分を納得させたかった。

調べた結果、男に限らず女だってそういうことをするという情報が得られた。

ところが問題はその「やり方」だった。

他の娘達がするときには、主に下半身のその……女性器を触るのが一般的らしい。

郁子は違った。ソコは怖くてあまり触ったことはない。

郁子は主に胸、乳房と乳首で性的快感を得ているのだった。

胸だけでいわゆる軽い「絶頂」にまで達せてしまう。

普通は胸だけで達する、というのはかなりの開発とコツがいるらしい。

自分は特別大きいから特別敏感なのかな、と思ったが情報によるとむしろ大きい胸は感覚が悪い、なんて情報が出てくる始末だ。

（いい加減やめないと……）

成長が止まらないばかりか、感覚もどんどん上昇しているのはこの自分のいけない行為が原因ではないかと思っている。

あと、牛乳が好物なのもいけないかもしれない……。

しかし止めようと思って止めれるのであれば人類はここまで繁栄していない訳で。

「ふう……ん」

寝転がりながらいつの間にかまた郁子の手は自分の膨らみに伸び始め、結局この日の夜も郁子は先日体育で見た翔太の腹筋をオカズに乳オナニーに耽ってしまっただった。



魔物化の前兆は複数ある。

どんな前兆かは変化する種族によって様々だが、どの種族であっても例外なく起こるのは性欲の増進である。

また、身体的な変異の起こる体の部位に痒みや疼きを感じる事も多い。

この段階の時点で他の魔物娘には魔力の変化による予兆が見て取れ、変化する種族はわからずとも遠からず魔物となるのがわかる。

多くの場合、その予兆に気付いた魔物娘はさりげなく、あるいは積極的に魔物化の手助けをしようとする。

「現代魔力研究部門主任 K・K」



「もぐもぐもぐ」

「ふー、ふー、ふー」

郁子は向かいに座る友人二人の顔をぼんやり眺めながら手元のアイスコーヒーをからからとストローでかき混ぜる。

向かって右側でクラブハウスサンドをもりもり食べてい

るのが百井 もい やちよ 八千代。

彼女はいつでも食欲旺盛だ。

こここの喫茶店に来るまでもたこ焼きを買い食いしていたはずなのだが……。

しかしながら運動部を掛け持ちする彼女はそれだけのエネルギーが必要になるのも納得の運動量を普段からこなしている。

小柄ながら躍動感に溢れる肉付きのいいスタイルと男女問わず好かれる天真爛漫な性格をした彼女との付き合い

は郁子が所属する「合気部」に彼女が救援に入った事から始まった。

……ちなみに郁子が合気道を習い始めたのは興味があつたからではなく、その体型から身に危険が迫る事が多かつたからである、悲しい事に。

その部活で見た八千代の技術の吸収力や身体能力の高さに驚いた事から付き合いが始まったのだが、どうも最近では付き合いが悪いのが現状だ、怪しい、と郁子は思っている。

そして向かって左でホットコーヒーをずっとふーふーし

ている猫舌の娘が魚住 うおずま 清 きよ。

透明感のある美貌に加えて手も足も指も首元もすらりと長く、しかし出るべきところはしっかりと出ている彼女のスタイルは男の理想よりも女の理想を体現していると言える。

こんなに美人なのにちよつと目を離すとふいと見失ってしまうような存在感なのが不思議である。

彼女とはクラスメイトであり、席が隣りだったので気が付けば友達になっていた、という感じだ。

しかしながらこちらも最近は減法付き合いが悪く、怪しい、と郁子は思っている。

「ねえ」

「「はい？」」

ぐで、とテーブルに崩れながら郁子が声をかけると二人ともこつちを見た。

「彼氏できた？」

「むぐっ！？」

「ふぶっ」

言われた瞬間、八千代はサンドイッチを喉に詰まらせて胸をどンドン叩き。

魚住はコーヒーを吹き散らす。

「あーはいはいその反応で充分ですごちそうさま」

「まっ、まだ何も言っていないツスよ！？」

「そそそ、そうです、なんの根拠を持って……」

「そうだね、友情より愛情だね」

べつちやりとテーブルに突っ伏しながら呪詛のように呟く郁子を相手に二人は焦る。

「や、あの、隠すつもりはなかったツスけど、そのう……」

「タ、タイミングが、ね……？」

「いーよいーよ怒つてないからほんとに……むしろその……聞きたいんだけど、どうやってその、仲を進展させたの……？告白、とか」

無意味にからからコーヒーを混ぜながら経験者がいるなら是非聞いてみたかった所を聞いてみる。

「告白は……えー、自分は、自分から言ったツスね……言った事になるのかな……？」

「自分から、かあ……」

「わ、私は、言ってもらいました」

「相手から、かあ……」

何となく元氣のない郁子とその質問に二人はピンと来たらしい。

「翔太くん、ですか」

「ツスよね？」

「……」

ちよつと前までは必死に否定していたのだがどうもこの二人はそういつた機微に非常に敏感なようで、最近隠すのもバカらしくなって来たところである。

「やっぱり自分からガンガン行くべきツスよ！いつでも責めの姿勢ツスよ！」

体育会系らしい考えを言う八千代であるが、その当人が責めの姿勢で告白したのかというところである。

「まだその……急がなくてもいいのでは？機が熟すまで……」

対照的に受け身な意見を言うのが魚住である、消極的というか、無理に焚きつけてこじれないようにとの氣遣いからの意見である。

しかし、郁子の本当に聞きたい所は実はもう一步踏み込んだ所にある。

「どこまでいったの」

その質問にどこまで？デートで行った場所？と首を傾げたのが八千代。

瞬時に何の話か悟って白い肌を赤くしたのが魚住。

「えつと……さいごまで……」

小さく手を上げて馬鹿正直に答える。

「えっ！？いったの！？」

思わず大声を出して慌てて声をひそめる。

「さいご？どこまでツスカ？北海道とか」

未だに理解してない八千代が頓珍漢なことを言う。

「意外……そういうところお堅そうに見えるのに」

「か、軽い気持ちでした訳ではないです」

八千代はほっといてひそひそ話す二人。

「そのっ……誰、とか、聞いていい？」

「あの……おおしまく……」

「え？」

「大島くん……」

「ほっほおう……」

郁子も女の子、恋バナは好物である。それも未知の領域に踏み込んだ先人となれば興味もひとしおだ。

「痛かった？」

「あ、あんまり……」

「よかった？」

「と、とても……」

我ながらスケベ親父のようだと思いがらついたりせずにと問いつめてしまう。

「最初っからよかったんだ……聞いてたのと違うなあ……」

……

「私達はちよつと普通とは違うので……」

「私達？」

「あ、いや、あの、その」

と、唐突に魚住がわたたと慌て始めた。

「あ………その！じ、自分も最後までいったツス！それはおもうずぶしと！」

遅れて理解した八千代が慌てて話に参加してきた、理解したのはいいがずっぷして。

「うわあ……みんな進んでるなあ……」

「こういうのは、その、早いほどいいというものでもないの、あの、それぞれのペースというものがあつてですわね……」

「でもさあ……あたしは……何か、欲望が先行しちゃつて……自分がちよつと普通じゃないんじゃないかな……」

ため息をつきながら言う。

「よくばー？」

はつとして口に手を当てる。恥ずかしい事を口走つてしまった気がする。

「い、いや、その、若さゆえのあれとかこれとか、ね？ その、やっぱり興味があるのは当然あたしも、ね？」

「……」

「……」

混乱してよくわからない言い訳を始める郁子を二人は何故か真剣な面持ちになって見ている。

「やあー！もおー！ヘンタイ見るみたいな目やめて

え！」

「……もしかして……」

「ツスカね……？」

手をわたたさせて恥ずかしがる郁子を尻目に、八千代と魚住は子を見合せてなにやらひそひそと言いつつ合っている。

「あの……」

「何よお」

「なにか最近……体調に変化とか、ありませんか？」

「へ？」

遠慮がちに言う魚住の言葉の真意がわからない。変化、と言われても……。

「別に何も……健康そのものだよ？」

「えつと……体調が普段よりいい、とか、風邪をひかなくなったりとかないツスカ？」

「昔から別に病気がちでもなかったし……てか、なんで急に体調の話に？」

訝しむ郁子の前で魚住は唇に指を当てて逡巡する様子を見せた。

（色っぽいなあ……）

「肩こり……」

「へ？」

「肩こりが、治ったりしてませんか？」

「肩こりい……？肩こりはそりやあ……ん？」

指摘されて初めて気付いた。



「えっ……あれっ……」

自分の肩をきよきよと見て腕をぐりぐりと回してみる。

「……ほんとだ……」

肩こり、それは天から豊かな胸を授かった女性がその代償の如く背負う不治の病。

胸が大きいという事はすなわち大きな塊を胸からぶら下げている訳で、男性にわかりやすく例えるならダンベルの重さのネックレスを常にかけているようなもので。

豊かな胸を持つ女性はこの症状と生涯付き合っていく以外にない。

中学時代から自らの傍若無人な発育に悩まされていた郁子も例に漏れず、定規で肩をとんととおばさん臭い事などをしていたものだが……。

「うわスゴいスゴいスゴい、ほんとだ、え？何で？どうして？」

嬉しいと同時に混乱する、言われないと気付かないほど自然に凝りは解消されていたのだが、理由がわからない、胸はますます大きくなってきているというのに……。

同時に二人の発言も気になる、先程の口振りからどうも自分の身に起きている変化について二人は何か思い当たる節があるらしい。

その二人は何か悟ったような様子で顔を見合わせてうんうんと頷きあっている。

「私にもわかるように説明してくれない……？」



空気感染の魔物化は段階を追って徐々に変化する。

その「前準備」の段階で精吸をすると一気に進行して魔物となるが、環境のみで変化した場合魔物化が完了するのは数ヶ月から年単位まで個人差により様々である。

その段階に出る兆候として顕著なのは前述した性欲の増進の他、持病の治癒、体力、身体能力の向上等。

概ね健康になる方向の変化が現れる。

面白い所では胸の大きい女性の場合、肩こりが治るのだという。

これがどういった原理で治癒しているのかというと、実は魔力の作用というより魔物の体質が関係している。

乳房の形を整えているのはクーパー靱帯という靱帯なのだが、人間の場合これは靱帯なのだから基本的に伸びたり切れたりすると元に戻らない。

よって形を保つためには極力揺らす等の負荷をかけないようにし、睡眠中もブラを付けて守るなどの努力が必要になる。

ところが魔物娘はこのクーパー靱帯を形成する成分そのものが違い、体質的に負荷を受けても修復されるようになっている。

それどころか負荷を受けるほどにこの靱帯は鍛えられ、より形が整うようになっていくのだ。

よって魔物娘が胸のケアをする場合は存分に腰を振って揺らし、伴侶の手によって負荷をかけてもらうのが良い。

話が逸れたが、肩こりの治療はこの魔物特有の強靱なクーパー靱帯による恩恵の一つであると考えられる。

世の胸の大きい人間女性達にこのメリットが広まったなら魔物化の進行に一役買うのではないかと思われる。

～現代魔力研究部門主任 K・K～



「藤さんとこの郁子ちゃん、随分帰りが遅かったみたいね、翔太アンタ何か知らない？」

「んん？」

唐揚げを飲み込みながら翔太は唐突に母から投げかけられた言葉の意味を考える。

「何でそれ俺に聞くんだよ……」

「アンタ関係してないの？」

「ねーよ」

「なーんだい意気地なしだねえ」

「アイツの帰りが遅いのに俺が関係ないってのと俺の意気地がないのはどう繋がるんだよ」

「まごまごしていると他のに取られるでしょうが」

「あーはいはいごっそさん」

まだぶつぶつと聞こえる台所からの母の小言に背を向けて翔太はさっさと自室に上がっていった。

ベッドに身を投げ出してスマホを取り出し、ぼんやりと眺める……が、どうにも落ち着かない様子でござる。とベッドの上を転がり、上半身を起こしてござる顔を擦る。

「くっそ……男じゃねーだろうな」

女々しいと思う、が、さつき聞いた事が気になる。  
十中八九女友達だとは思うが、そんなに遅くなるまで何をしていたのか。

からかつてばかりの翔太が言えた義理ではないのだが、悪い虫が付くんじやないかいつもはらはらしているのだ。

本当のところは好きなのだからしょうがない、この歳特有の好きだから意地悪したいというアレだ。

それともかなり年が入っている。

実のところ異性として意識し始めたのは翔太の方が先である。

「……」

なんとなくスマホでいつものおかずを検索し始めたりする。

「巨乳」「爆乳」「おっぱい」「デカパイ」……

健全な男であれば女性の胸に興味があるのは至極当然の事である。

その中でも特にサイズの大きい胸に情熱を注ぐのが俗に言う「おっぱい星人」である。

翔太はどこに出しても恥ずかしくない立派なおっぱい星人であるが、それが先天性のものであるかという怪しい。

原因は言うまでもなく幼馴染みの藤郁子だと断言できる。

記憶では確か小学校低学年あたりから既に胸元が目立ち始め、誰よりも早くブラをつけ始めたのが郁子だ。

それから止まることなくすすすすすすすすすす成長を続け、中学にもなるとクラスどころか学校中でも（教師含め）一番のサイズになっていた。

全く無かった頃からそんなになるまでの変化を多感な時期に近くでつぶさに見せられて影響を受けない訳もなく、翔太にとって郁子の胸はまさしく性の目覚めから精通までお世話になったエロスの象徴であった。

無論、惚れたのはその部位のみではない。

多感な時期にそんな特徴を備えていた郁子は様々な好奇心やつかみを受けたが、持ち前の明るさと負けん気の強さでそれらをはね除け、胸を張って堂々としている。

そんな芯の強い気性を表すような意思の強い眼差しをした猫系の顔立ち。

その顔と全力でセックスアピールをする胸のコントラストがどうにもこうにもたまらない。

「違うんだよなあ……」

スマホに映し出される様々なグラビアアイドルやAV女優のおっぱい。

言うまでもなくサイズの大きさだけでなく、形状にも様々な個性がある。

観賞したくなるような整った美しいおっぱい。

谷間に甘えたくなるような母性を感じるおっぱい。

どれも違つてどれもいい。

だが翔太の理想はやはり郁子なのだ。

郁子のおっぱいはエロい、とにかくエロい。

正面に立つだけで揉めるものなら揉んでみるとばかりに前方に突き出したそれは雄の獣欲を挑発して止まない。

とにかく滅茶苦茶に揉みたくりたい、ただで済まさないという気持ちにさせてしまうのだ。

その誘惑に蛾のように引き寄せられた哀れな痴漢達が手を捻り上げられて駅員に突き出される場面を翔太は何度も見てきたので、最も近くにいながらからかうのみで実際に手を出した事はないのだった。

しかし、最近は危険に感じる事が多くなつてきた。

何が危険かという自分の理性がだ。

元々色っぽかったのが近頃はますます……いや、不自然なほどに視線が引き付けられてしまう。

側にいるだけでムラムラと下半身が元気になつてしまう。

いくら自分が若いからつてこれは異常ではないかと思うのだが

「はああああ……」

色々なものを含んだ溜息を吐き出す翔太の夜は更けていく。



「ただいまー」

「お帰りなさい、遅かったのね」

「ん、ちよつと友達と話し込んでちゃって」

「あら珍しい」

普通、娘の帰りが遅ければもう少し怒られそうなものだが、郁子の両親は娘に大きな信頼を置いているらしい。

「ごはんは？」

「ごめん、今日食べて来ちゃった」

それだけ言つてさつさと部屋に引つ込んでしまった娘を見て母は首をかしげた。

ボタン

「はあ……はあ……」

どうにか平常心を保って帰宅した郁子はドアに背を預けて荒い息をつく。

しばらく息を整えた後、部屋の姿見の前に立つ。

「……く……」

緊張した面持ちでそつと頭に手を当て、ぎゅ、と目を閉じる。

もさつ

手を押し退けて頭から生えて来たのは立派な牛の角。

そして変形して長くなった獣の耳。

もふん、と感じるのは足を豊かに覆う獣毛、慣れないつ

ま先……蹄の感覚……。

「やっぱ……」

姿見の姿を見ながらぼんやりと口にする。

「……牛かあ……まじか……」



「ホルスタウロスですね」

「ほるすたうろす」

向かいに座った魚住が言った単語をオウム返しする。

「どういう……アレなの？」

「ええと……牛さん、ですね」

「うし、あー……牛……」

「……」

「……」

「二人共ソコを見ながら納得って顔しないでよ」

釈然としない顔をしているのは頭に一対の角を生やした郁子。

そして郁子の顔よりその下に視線を向けているのが魚住と八千代。その二人もまた人間にはありえないものを頭から生やしている。

魚住は四つの角、八千代はふさふさした獣の耳……。

最初に見せられた時は驚くより二人共からかっているんだと思つて笑つたが、その後みるみる変化していく八千代の手足や青白くなる魚住の肌を見て笑つていられなくなった。

さらにその後続々と明らかになる真実に郁子の頭は混乱を極めたが、二人の必死の説明によってなんとか平静を取り戻し、自分の現状をどうにかこうにか受け入れたのがついこの間。

それでも「遠くないうちに変化が現れると思います」なんて言葉には半信半疑だったが、実際こうして角が生えてしまつては受け入れざるをえなかった。

「それにしても……本当にいるんだねえこんな……ビビるわー……」

周囲を見回しながら郁子は驚くというより呆れた顔になる。

そう、ここは三人がいつも集まつてゐる喫茶店ではなく二人に案内してもらつた見知らぬ店。

ガードマンのような女性が立っている入口を抜けるとそこは既に人外パラダイス。

獣やら虫やら蛇やらの特徴を持った人から何かフワフワと浮いてゐる人までが普通の人間のように談笑し、食事し、茶や酒を嗜んでいる。

最初は流石にちよつとした恐怖を感じたがその客達の様子は普通の人間とまるで変わりなく、なおかつ友人も自分自身も異形なのは同じなのですぐに受け入れてしまつた。

何より注文したコーヒーとケーキがものすごく美味しい。

聞く話によるとこういった「魔物娘」の交流の場は全国に点在しているらしい。世の中知らない事ばかりである。

ここに今日集まつて女子……魔物会を開いたのは自分がいいよ第二の人生のスタート、というアレだが、本格的に魔物となつたからだ。

何しろわからない事だらけなので友人を頼りたい、とりあえずは自分の種族やら習性やらの基本的な知識が欲しかった。

「それでその……ほる？……ほるすたうろすつてのがその、あたしの種族な訳ね……ついでに聞くとやっちゃんと魚住さんはどういのなの？」

「自分、ワーウルフツて種族ツス」

「あ、わたしは……ネレイス、です」

「わーうる、ふ、に、ねれいす……ね、なんかゲームのキャラみたいな名前ね……」

「似たようなもんツス」

「似たようなもんなんだ……」

郁子はそれぞれの頭をちらちらと見比べて見る。

「やっちゃんはやつぱり犬……？うん、イメージ通りだね」

「………狼ツス………」

「あ、ああ、そう、ごめん」

どんよりした顔で言われて慌てて訂正する。

「そッスか……やっぱ狼には見えないッスか……」

「あれ……なんか、地雷踏んだ感じ？」

「いいッス……気にしないでいいッス……」

耳をべったりと下げながら言う。それ以上触ってはいけないと判断した郁子は魚住に話を振る。

「魚住さんって……何だろ、角四本って何かよくわからないんだけど」

「あはは……私は魚です」

「魚？」

「ええ、まあ、こちらで言う半魚人、というもので……」

「……」

「半魚人……」

半魚人、と聞いて思い浮かぶイメージというと鱗だらけの醜い魚の化物なのだがどうも目の前の綺麗な魚住とは重ならない。

ただ、その蒼い肌と髪を見ると何となく海のイメージはしっくり来るのだった。

「え、じゃあ……泳ぐの得意とか？」

「はい、元々は海に住んでる生き物なので……地上を走るよりも泳ぐ方が得意、ですね……水中で息できますし」

「へーえ！すごい！やっちゃん……やっぱあんだけ運動神経いいのはわーうるふだからなの？」

「そッスね、あと人より鼻も耳も効くッスね」

「警察犬みたいに……えー、あー、狼みたいに効くんだね？」

「無理にフオローしなくていいッス……」

「それじゃあ私も何か特別な事とか出来るようになるのかな？その、ほるたうろすって……」

「ホルスタウロスはその……」

微妙に魚住が言いよどむ。その時点で郁子は若干嫌な予感を覚える。

そう言えば自分は牛だと言っていた。牛という……。

「とつても力持ちッスね」

「ははあ、それは嬉しいね」

「あと、美味しい牛乳がいっぱい出せるッス」

「ええ！そうでしょうね！なんかそんな予感してたよ！贅沢言わないけどもうちょっとカッコイイ能力欲しかったな！」

頭を抱えてテーブルに突っ伏す。



「い、いや、すごい事ッスよ！」

「そうですよ！生産的というか……」

「生産的って酪農的な意味よね！？」

水中で息が出来て高速で泳げる、嗅覚や聴覚、運動神経に優れる、の後に来て牛乳が出せる、である。

「あちらの世界ではとても有益な種族として重宝されてるんですよ、牧場を経営していたりとか……」

「今聞き捨てならない単語聞こえたけど牧場って……売るの？おっぱいを？そんな家畜みたいなのやあよ」

「いえあの、業務的なではなくて、夫婦で経営されてるんです……夫の手で絞ってもらうと上質なミルクが取れるそうで……」

「……………いやいやいやヘンタイよヘンタイ！何より一瞬ちよつといいかもって思った自分にドン引きだわ！」

「あ、ちなみに郁さんが飲んでるカフェオレに使われているミルクもそうです」

「えっ」

思わずカップに目を落とした後、店内をぐるりと見回す。

自分と同じ特徴を持った人と言えば……。

カウンターの前に立って作業している店員の一人と目が合った。

角に、長い耳、牛の蹄に、エプロンを押し上げる巨大な膨らみ……。

その店員はにこ、と笑って口に手を添えて小声で聞いてきた。

「おいしいですか？」

「あ、はい……」

「よかったです♪」

そう言って接客に戻って行った。

「……」

その店員の揺れる胸元と手元のカップをちらちら見比べた後、改めて恐る恐る口をつける。

「おいしい……んだけど、なんかこう、恥ずい……」

「そのショートケーキのクリームにも使われてますね」

「どうりでおいしい訳だわ……でもなんか恥ずい……」

赤面しながらケーキをつつく。

「翔太君に飲ませてあげたらどうッスか？」

カラーン、と郁子の手からフォークが落ちる。

「な、何をよ」

「いくつちの牛乳を」

「そんなことになったら恥ずかしくて記憶無くすくらい殴るしかなくなるわよ」

「そ、そんなにッスか？」

「でも……」

魚住が目元に笑みを浮かべながら言う。

「嫌では、無いんですね？」

「いつ……」

口元を歪めて何とも言えない表情になった郁子はカフェオレをぐいっと飲み干してカップを戻すとパンパンと手を叩いた。

「はいっ、終わり！この話題おしまい！」

「否定しなかったツスねー」

「正直ですよ」

「おーしーまーいつてば！もうっ……そういう二人こそ

彼氏とはどうなのよ？」

反撃のつもりで話を振る。

「どう、とは？」

「そのっ……性生活、とか……」

言いながら赤面してしまう、この手の話題には慣れていない。

「大島くんは……ふふっ、そうですね……」

意外にも奥手そうな魚住が嬉しそうする。

「け、結構ガンガン来られたり？」

明るく積極的な大島と控えめで清楚な印象の魚住の組み合わせだとそんなイメージがする。

「いいえ……それが、ですね……大島くんって……」

口元を隠して囁くように言う。

「かわいいんですね……」

どき、とすると同時にぞわりと鳥肌が立った。

清楚で儂げな雰囲気な魚住がその時恐ろしく妖艶に見えたのだ。

「えへへ……先輩もかわいいツスね……」

ぺろ、と唇を舐める八千代にも同様の感覚を感じた。

いつも小動物のような雰囲気、まるで肉食獣のような……。

そういえば説明の中で言っていた。

自分たちは様々な種族に分類されるが、基本的には「サキュバス」という、男を誘惑する種族が元になっていると……

「……私も誘惑できるかな」

「えっ、翔太君をツスカ？」

「ちがつ……えー、そうよ……私にももう少し二人みたいに色気があれば……」

「えっ」

「えっ」

鳩が豆鉄砲食らった顔で二人は郁子の胸元に視線を移す。

「だからそーゆー魅力じゃなくなつて！」

ぱんつとテーブルを叩くと同時にその「色気」がたゆゆん、と揺れる。

「もつとこう……こういう下品なのじゃなくなつて魔力的なあだるていーな……」

「でも、翔太君は下品なの好きそうッス」

「そつ……私からは何とも……」

八千代はしらつと断言し、魚住は手をばたばた振りながら言葉を濁す。

「下品が好きつて……そうかな……そうかも……」

「そういう色々売つてるお店知ってるッスよ？」

「お店？何の？」

「色々ッス」

「いろいろ」

「あ、それはいいかもですね」

顔を見合せて二人はうんうんと頷き合う。

「……また何かあるの？つて言うかあたし財布がそろそろ……」

「初めてなんだから奢るッスよ」

「じゃ行く」

「……」



「こ……これ……」

郁子がふるふる震える指でつまんでいるのは下着……下着、のはずだ。

肝心かなめの部分の布がケチられている所が大いに問題だ。

「……それはオープンクロッチ、ですね」

「いやああ魚住さんの口からそんな知識聞きたくなかった……」

「わたし、むつつりですよ？」

「堂々としてるし……！」

郁子が嘆いている場所はショップ「カラーパープル」。

魔物御用達のこの店は先ほどの店から出て路地裏に入つてすぐの所にあつた。

表向きは寂れたアンティークショップといった外観なのだが。中に入ってみると意外な程に広く、そして珍しい物が沢山並んでいた。

小物やアクセサリー類、宝石類から怪し気な道具まで……。

さらに奥に進むと見たことのない形状の服が色とりどりに並べられていた。

考えてみれば人間と違う体型の魔物達に合わせた衣類もあつてしかるべきである。

いつもの通学路からそう遠くないこの場所にこのような店があるなど全く気付かなかった。

聞くところによると普通の人はここまで辿り着けないよう魔術による細工がなされているのだという。

「こんなのがあるって、つまりここってアダルトショッブなんじゃ……」

「ふふ、確かにそういった商品も目玉の一つだけど、それだけではないんですよ」

頭上から降ってきた声にぎよつとする。

「他にも色々……そう、色々と面白いものが揃っているんですよ、ゆつくりご覧になって下さいな」

丁寧な物腰で言うのはこの店の店主であり、作られている衣類を手掛けているという巢飼（すがい）だ。

「そそそそそんなですかはい」

失礼だとは思いますが、やはり急に対峙すると腰が抜けそうになる。

そう、彼女は下半身が人のそれではなく蜘蛛になっている。アラクネという種族らしい。

魔物の仲間入りを果たしてまだ日が浅い郁子にとってはまだハードルの高い種族である。

「怖がらなくても大丈夫……と、言っても慣れるのは時間がかかるものね？ふふ、怯えている所も可愛いわあ……♪」

多脚をかしやり、と蠢かせながら妖艶に微笑む彼女はもうも怖がられる事を悲しむどころかむしろ楽しんでいる節さえあるようだ。

DSである。

「ところでお客様、不躰な質問をするのだけれど……」

「は、はい？」

「下着のサイズは合ってらっしゃるのかしら？」

「……」

やはり、衣類を扱う職業の人にはわかってしまうものか。

「実はその……ブラが……」

「そうねえ……そのくらのサイズになると国内では手に入りづらいでしょうねえ……でもここなら安心よ、魔物達は人間よりも平均してサイズの大きい子が多いものだから海外クラスのサイズも安価で取り揃えておりますわ」

「い、いえ、実はその、自分のサイズの事がよく……三桁超えてから怖くて測ってなくて……」

「んまあ！それはそれはいけませんわ、身体に合っていない服は見栄が良くないだけでなく、健康にもよくないものなんですよ！」

妖艶な雰囲気から一転して真面目な顔になった巢飼はかさかさとして素早く店内を動き回ると三つほどのブラを手にして戻って来た。

「ぶふっ！」

しかし郁子はそのブラを見て思わず吹き出してしまう。

「あつはははは！でつか！デカすぎですって！そんなの初めて見ましたよ！スイカ包めるんじゃない？」

「い、いえ、お客様にはこのくらいのが必要ですわ」

「いくら私が大きいってそこまでじゃないですよ！」

「とりあえず試着してみてくださいな」

「えー？合わないと思うけど……」



「お買い上げですね？」

「はい……びつたりでした……」

呆然とした様子で試着室から出てくる郁子に巢飼はにっこり微笑んだ。

「ふふ……それほど素敵なスタイルをしてらっしゃるのですたら、こちらなんかもお似合いになれるかと……」

「まってまってまって！それエッチ下着でしょ！？あたしが買ってどうすんの！？誰に見せろと！？」

「翔太くん以外にいるんスか？」

「誰が翔太以外に見せるか！」

「ほほう、見せたい相手は翔太君というんですね……」

……

郁子は顔を覆って崩れ落ちる、どうして自分はこうも迂闊なのか。

「まあまあ、折角だから試着だけでも……」

「ヤダってば！こんな恥ずかしい……」

「でも翔太くんは喜ぶッスよねこれ」

「これで喜ばない子なんていませんよお……特に貴方みたいな素敵な娘にアプローチされて……」

「そ、そうかな……」

そしてどうしてこう流されやすいのか。

「八千代さんも彼氏にとっても喜んでもらえましたものね……？この前の……」

「ちよわーっ！どうして言うんスカ！」

流れ弾が飛んできた八千代はわたたしはじめ。

「だけどお金……やっちゃんにそんなに奢って貰うわけには」

「いいんですよお、今回は始めてのお客様という事でサービスしますわ……それに魔物として、恋する乙女を応援しない訳にはいきませんからね」

「あ、サービスですか？じゃ、買います」

「……郁子ちゃんって、いい奥さんになれそうですね……」



「よう、今日もデカいな」

「よう、くたばりやがれ」

朝の登校時に開口一番でこれである。しかし二人は喧嘩している訳ではない、すっと手を上げて言う翔太にさらっと郁子が返す。

これが二人の朝の挨拶なのだ。

「暑くなってきたな……」

「その暑い日の朝に暑苦しいアンタの顔見ると余計暑いよ」

「そりやあ谷間もムレムレだろうしな」

「夏になったら毎回毎回それ言われるからもう返しも思いつかないわよ……」

歩きながらつらつらと会話は続く。馴染みが故の遠慮のない会話。

そこだけを見るととても郁子が翔太に想いを寄せているとは思えない。

そして無論、ちゃんと人間の姿にしているので既に郁子が人間ではないとは想像もつかない。

ついでに言うの数日前に郁子が翔太の為にスケベ服を複数購入したなんて事実も翔太は知らない。

あらゆる変化を内に孕みながらその日の朝もいつもと変わらない始まりを迎えた。

だが、最近ほんの少し翔太の様子がいつもと違う。

ほんの少しなのだが、郁子はそれに気付いた。

いつもなら並んで歩くのに、半歩ほど後ろからついてこようとするのだ。

怪訝に思つて歩調を合わせようとする慌てていつものように隣に並ぶ。

その後もそわそわと視線に落ち着きがない。

「何？」

「あ？何が？」

「いや、そっちが何よ？」

「何が何よ？」

「……まあ、いいけどさ」

「意味わかんねえ」

探ろうとしてもはぐらかされるので深くは聞かなかつたが、明らかに最近の翔太の様子はいつもと違つていた。

そう、郁子が一見して変わらないよに見えて変化しているように、翔太側にもまた事情が出来ていたのだ。

それは丁度郁子が服を買つた日。

翔太は部活を終えて陸上仲間と帰りにコロツケを買い食いつている所だつた。

仲間の一人が翔太にこう聞いた。

「お前さあ、藤の乳揉んだ事あんの？」

「当然だろ」

「それどうせ小学校とかの話だろ？今みたいになつてからはないだろ」

図星だ、散々からかつては来たがネタにするのと実際に手を出すのは話が違ふ。

小学校の時にふざけて触つて先生に死ぬほど怒られたのを境に物理的なちよつかいを出すのは控えている。

だがそれを正直に言うのは悔しかった。

「はあ？今も揉みまくりに決まつてんだろ！」

なのでそうして誇張して言つてしまった。

そこからは売り言葉に買い言葉、最終的に「実際揉むところを観衆の中でやってみせろ」との約束をするに至つてしまった。

ぶん殴られたりぶん投げられたりするのならまだいい、女子共から変態の烙印を押されるのも今更だ。

だがもしかして泣き出されでもしたらどうしようか。

そんな事を悶々と考えながら今日に至る。

そんなに悩むなら仲間と正直に言えばよさそうなものだが、大きく出た手前今更撤回するのもダサいというちつぽけなプライドがそれを邪魔する。

なおかつ本人は殆ど自覚していないが、ずっと見続けてきた郁子の乳房にどうしても触りたいという欲求が今回の件で抑えられなくなっているのだ。

そろそろ実行せねばならない、したい、という負い目から態度がおかしくなっているのである。



そんな事情を知らない郁子はただ首を傾げるばかりだった。



事件が起きたのはその昼休み。

郁子が弁当を食べ終えて一人、スマホをいじっている時だった。

いつもお喋りしている友人は共にトイレに行き、丁度一人になった所。

密かに郁子の動向を伺っていた翔太は心臓を人知れずバクバクさせながらこっそりと行動を開始した。

(……あ、動いた)

そして実は今日一日、こちらもずっと翔太の動向を伺っていた郁子はその動きに気づく。

だが彼の目的がわからない郁子は気づかないフリをする。もし彼がどこかへ行こうとするならこっそり後を付けようと考えていたのだ。

しかし予想に反して翔太は教室から出ようとはせず、そこそと自分の席に近付いて来た。

(……何？……あたしに用？……何で堂々と声かけないの？)

魔物になってからより鋭敏になった感覚で郁子は翔太の動きを仔細に読み取っている。

姿勢を低くして自分の背後に近付いて来ている、郁子に気付かれているとは思っていない。

背後に回り、そつと両手を広げる。

(な、何するの？)

手を広げたままそろそろと近付いてくる。

その手つき、動き、背後からというポジション。

(え……？え……？胸、触る、の？え……マジ？)

動きからしてそうしようとしているとしか思えない、今まで口でどう言おうとそんな事しようとしなかったのに。

カッと頭に血が昇り、心臓がどくどくと脈打ち始める。

他の誰かであればいくらでもやりようはあった。

不埒者が自分に指一本触れる前に手を掴んで取り押さえてやることも、顔面に掌底入れてやる事もできる。

何しろ魔物化してから自分は絶好調なのだ。

しかしその相手が翔太だったものだから、郁子はつい、というか思わず、というか。

「んん……」



両腕を組んでぐぐーっと伸びをした。

胸を張り、突き出すように、触りやすいように……

「……………!!」

そこまでするつもりはなかった。

ちよっただけ、表面をさらりと撫でてやるだけ……

ところがそこで郁子がよりによって背伸びをしたのだ。

制服をみちみちに張り詰めさせている胸を突き出すように。

後ろからでも背中の輪郭からはみ出て見える果実がゆさ  
ん、と揺れる。

そこまでするつもりは、なかったのだ。

ただ、どうぞ揉んでくださいみたいな動きをするもの  
から……。

がばっ

ぐにゅんっ

翔太の五本の指が深々と郁子の乳房に食い込んだ。

「うわでつつつつつかい……！」

両手から伝わる柔らかさ、弾力、重みが翔太の脳を直撃した直後。

「んつつお、つつ！」

ガタン！ ゴンツッ！

教室に二つの音と声が響き、クラス中の視線が集まった。

そこにあつたのは胸を抑えて机にうずくまっている郁子とその後ろでひっくり返っている翔太。

「ぬごおおお……！」

その翔太は鼻を抑えて悶絶している。

こっそり行われた行為だったのでクラスの人々はその現場を目撃しなかったが、起きた事はこうだ。

翔太が後ろから驚掴みにした瞬間、郁子の喉から少女のものと思えない呻き声が漏れ、同時に足が電気を流されたカエルが如くびいん！と跳ね上がって机を蹴り上げた。

同時に背中も仰け反り、急激に反り返った頭は結果的に背後の翔太に強烈な頭突きを食らわせる形になった。

「ふっ……！ふっ……！ふっ……！ふっ……！」

荒い息を吐く郁子はそれ以上無様な声が上がらないように必死で口元を押さえていた、が、クラスの視線が集まっているのを感じ、自分がするべきことを理解した、それはすなわち。

「いひ加減にひなひやい！」

すばあん！

「あいでえ！」

思い切り上ずって舌も回っていなかったが、どうにか「いい加減にしなさい」と言う机の上にあつた教科書を丸めてうずくまっている翔太の頭をひっぱたいた。どつ、と教室が笑いの渦に巻き込まれる。

（これで、いい）

自分がツツコミを入れた事で今の一連の流れはいつもの「夫婦漫才」だと受け止められた。

あそこで自分が黙ってずっとうずくまっていたならセクハラ問題に発展して翔太が危なかった。

「……つたくもう汚い手で触りやがってえ……」

ぶつぶつ言いながらそそくさと席を立つとトイレに向かう。

向かうのだが……

（あ……足、足、ちゃんと、動いて……）

ふわりふわりとその足取りは頼りない、まるで踵が浮き上がっているようだ。

しかしそれを悟られないように必死に平静を装って廊下を歩く。

途中、トイレから帰ってきた友人とすれ違う。

「あ、いくつち……どうしたの？大丈夫？」

「……うん」

ろくな返事ができない、怪訝そうな顔をしている友人を置いてとにかくよろよろとトイレに駆け込む。

入って、鍵を閉める。

「……………くはっっ！はああっ！ふううっ！」

堪えていた息を吐き出し、壁に背を預けてずるずる崩れ落ちる。

「ふっ、はっ、ふっ、はっ、ふっ」

過剰な運動をした直後のような呼吸をしながら自分の身に起きている事を把握しようとする。

胸を触られたのは初めてではない、ふざけ半分で女友達に触られたりする事も結構ある。そんな時はくすぐったいだけだ。

自分で「する」時だってそういう気持ちで時間をかけて刺激することで始めて感覚が引き出される。

ところが、あの時。

翔太のゴツゴツとした指が乳房に食い込んだ瞬間。

郁子はあらゆる段階を飛ばして、いきなり絶頂に突き上げられていた。

胸が搾り上げられた瞬間目の奥に火花が散り、体が制御を失い、そこが教室である事すら一瞬間から消え去った。

思わぬ反射運動でその刺激から解放された後もチカチカと目の前に星が散り、自慰行為で達したときのフワフワした感覚が体を支配していた。

いや、今でもだ。

（む、胸……むね苦しい……）

元々窮屈だった胸元がより一層苦しく感じ、たまらず郁子は制服のボタンを外して胸元を開き、ブラを取った。

ぼるん、と、制服には不釣り合いな砲弾のような肉が胸元からこぼれ落ちる。

（……熱、い……おっぱい熱い……）

はしたなくらいに乳首が勃起してしまっている、そして制服越しでも感じた翔太の手の感覚がいつまでも残っている。

まるで素肌を平手で思い切り張られて手形が残った時のように。

翔太に揉まれた部分に真つ赤な手形が残っているような感覚がする、そこがジンジン熱い。

「あ、あうっ、お、おふっ」

その時の感触を克明に思い出してしまった郁子は、また乳房をふるふる揺らしながら軽い絶頂に攫われた。

次の日、郁子は学校を休んだ。



カラン、カラン、カララン

快晴の空に鐘の音が響く。

郁子は簡素な小屋の中にいた。

外からの朝の日差しを感じながらじっと何かを待っている。

(……わたし、何やってんだろ)

ぼんやりと考える。

朝も早くから自分はこの場所で何を……。

と、外から草を踏む音が聞こえた。

その瞬間郁子は自分のするべき事を思い出した、小屋の壁に手をついて「待機」の姿勢をとる。

カララン

「よし、と」

小屋に入ってきたのは翔太だった、麦わら帽子を被った農夫みたいな格好で手にはバケツを持っている。

そこで始めて自分の格好にも気が付く。

腰布一枚に上はブラ一つ、こんな小屋でしていい格好ではない。

極めつけは首に付けたチョーカーから下がるカウベル、先程から鳴っている音はこの音だったのだ。

翔太はちゃんと服を着ているというのが余計に恥ずかしい、でもこれは必要なスタイル。

「さて、一番搾りといくか」

そう、朝のミルクを搾らないといけないのだから。

翔太は壁に手をついて腰を突き出すような姿勢をしている郁子の下にバケツを置くと、はらりとブラを取り払ってしまう。

ゆさん、と乳房が朝の澄んだ空気の中に晒される。

恥ずかしくて手で隠そうとしてしまう自分を抑えて手ぎゅっと握り締めた。